

五月十六日付の本欄で「科学・技術の軍事利用の危機」について書いたが、それから三カ月少し経ったただけなのに軍学共同（防衛省と大学や研究機関の研究者間の軍事技術に関する連携・共同研究）の動きが急進展しており、再度その危険性について書いておきたい。

昨年十二月に閣議決定された防衛計画大綱で「大学や研究機関との連携の充実」を謳ったのに引き続き、今年六月に防衛省は「防衛生産・技術基盤戦略」を策定して「大学や研究機関・企業への防衛省独自の競争的資金提供制度創設を検討する」ことを決定した。そして八月に、この研究資金制度として一年二十億円・三年間で六十億円の概算要求を財務省に提出した。本格的に大学・研究機関の軍事研究に研究基金を創設

軍学共同が急進展している

科学研究の自由を阻害



池内 了

する体制が整えられつつあるのだ。また、将来軍学共同へと展開していきそうな公募研究として、総合科学技術会議が推進主体である「革新的研究開

への参加を促すという役割を果たしている米国防総省の組織である。すると、日本のIMPACTも軍事研究のための予備的研究組織となっていく可能性が高いのだ。

さらに、国防総省が来年六月に開催するロボットコンテストに経済産業省が仲立ちして、東大、産業技術総合研究所、東大・千葉工業大・大阪大・神戸大合同の計三チームが参加する予定である。このコンテストの目的は「ロボット技術の災害現場への応用」とされているが、軍事転用の可能性も示唆している。

軍事に利用されることも承知の上で、ロボットに参加していくのであるのか。言うまでもなく、現代の科学・技術は民生研究にも軍事研究にも等しく適用できる。これをデュアルユースというが、このことによって研究者が軍事研究に参加するハード

評価会決定を盾に拒否した。そこで防衛省は文部科学省を通じて東大に働きかけ、方針変更を迫る構えと報道されている。当の東大教授は「研究への参加ではなく、最先端の情報を得る目的」と称して、大学には無断で防衛省の分析チームにオブザーバー参加し

た落合恵子も加わり、小澤・加賀、落合・小澤、加賀・落合と三つの対談をまとめて『長生き時代』を生きた（集英社）が刊行さ

ルを下げることになる。軍機関から金はもらってはいても自分は基礎研究をしており、軍事開発は軍機関が行っているという言い訳ができるからだ。

展覧会

★公募—日本の絵画2012優秀賞
永松あき子展 中央区銀座4の10の6、永井画廊（8日～13日）



小波

日本人男性の平均寿命が八十歳を超えたが、三大陸生き病にどう対処したらいいのか。脳梗塞、認知症、ロコモティブシン

然への畏敬も得られると高邁である。小澤はまた、死は逆説的ではないこと、死なないと種の保存はできない、死はリサイクルなん

言ったが、小澤はこの老年の体感を大事にせよという所に達している。老人問題を突きつめていくと、その人なりに突きつめたところに到達するらしい。「私な

家具や照明など300点
目黒でネルソン展
二十世紀米国を代表する工業デザイナー、ジョージ・ネルソンの業績の全体像を、家具などの作品とともに紹介する「ジョージ・ネルソン展」が東京・目黒区美術館で開催

なぜ私がS中佐をど完全にやつつけたと、意見を妥当だしていた理由がもちきい。もう一つ、Sは民政上のことでか争いしたことがあつ部隊の兵隊が島民ナを強要して、島民からと断ったと頭を殴って昏倒さで、抗議を申し込んがある。そのときはつは軍人よりも現地員にするやつだ」と将校に漏らしていたの後ひどい剣幕で「